

キャラクター名

プレイヤー名

グリゴリー・グルシュコ

シンドローム	モルフェウス		ワークス	マフィア	カヴァー	マスコットキャラクターの中の人
	エンジェルハイドウ					
オプショナル			年齢	32	性別	男
覚醒	死	衝動	加虐		初期侵食率	33%
出自			経験	邂逅		

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	23
肉体	1	0	0			1	行動値	13
感覚	5	1	0			6	(非装備時)	13
精神	1	0	0			1	戦闘移動	18
社会	1	0	0			1	全力移動	36

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	6		R C			交渉	1	
回避			知覚			意志			調達	1	
運転：	2		芸術：			知識：			情報：裏社会	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
ギガンティックガンズ	射撃	6r+6		17		
↳100↑	射撃	6r+6		18		
ドーブリヴェーテル、パルニョル		0				2+3、ギガンティックガンズ作成
プレシェンリィ・プッレ	射撃	11r+6		17		(2+3済)4+5の後1、C値8

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品		合計装甲：	0	合計回避：	0
コネ：UGN幹部		ロイス			
コネ：要人への貸し					
情報収集チーム		対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス消費
		D：錬金術師	P	N	
		シンデレラパーティー	P 尽力	N 不信任	
		グリグルゴロファミリー	P 傾倒	N 脅威	
		バーニング・トワイライト	P 好意	N 隔意	
			P	N	
			P	N	
			P	N	
		最大財産P:	4	残り財産P：	0

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
砂の加護	3	3	オート	視界	単体	自動	-	
効果：判定ダイス+4個、ラウンド1回								
ハンドレットガンズ	3	5	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果：武器作成								
ジャイアントウェポン	1	2	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果：《ハンドレットガンズ》の武器攻撃力+5、他武器装備不可付与								
コンセントレイト：モルフェウス	2	2	メジャー	-	-	-	-	
効果：C値-2								
カスタマイズ	1	2	メジャー	武器	-	対決	-	
効果：判定ダイス+1個								
ギガンティックモード	1	3	メジャー	武器	範囲(選択)	対決	-	
効果：対象を範囲(選択)に、判定後武器破壊								
クリスタライズ	3	4	メジャー	-	-	対決	100↑	
効果：攻撃力+9、装甲無視、シナリオ3回								
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

ロシアマフィア、グリグルゴロファミリー日本支部の構成員。  
今回はボスからの指令で、どうにも不穏である「シンデレラパーティー」の調査のため、マスコットキャラクターの着ぐるみの中の人として潜入。  
ジャパンのカルチャーにお熱。

くだらない、本当にくだらない人生だった。  
なんの理由も、目的も、信念もない喧嘩を無意味に繰り返す生活。  
ある日、少年は「喧嘩を売ってはいけぬ相手」にケンカを売ってしまった。  
マフィアと呼ばれるそれは、少年をいとも簡単に殺した。  
目に付いた虫は殺すし、楯突いたチンピラは殺す。  
彼らにとって当然とも言える圧倒的な暴力で、少年は短くも無価値な人生に幕を閉じた。

――そして、価値が付与された人生が幕を開けた。

死んだはずの少年は、何故か起き上がっていた。  
そしていつの間にか、いやによく馴染む拳銃を手に入れた。  
その拳銃を目の前で愕然とする黒服たちに向けて、拳銃は周囲の建物の壁を削り取るように肥大化していく。  
おかしい…自身には希薄だったはずのあの感情が沸き上がってくる。  
使っていなかったはずの筋肉が引き上がり、元に戻せない。  
次の瞬間には引き金を引いていた。  
すると目の前の黒服は無価値な肉と化していた。  
それを目の当たりにして、満面の笑みを浮かべる少年は気づいた。